

2007 年度 勉学奨励論文

「青年期における友人関係と自己形成」

法学部 05J024

大上晃礼(オウエアキリ)

## 序章

「各人にとっては自分自身が最も遠いものである」これはニーチェが引いていたドイツの格言であるが、今この言葉がリアリティーをもって頭に響いているのは、なにも現代の若者だけではないような気がしてならない。そのことを日々実感し、期せずして青年期にいる筆者は、本論文において、まず自己形成について他者理解と自己の生きる意味から考察し、次に青年期における自己形成の特長について述べた上で、最後に青年期の友人関係と自己形成についての考察を行う。では以下論ずる。

## 第一章 自己と他者

さて自己形成について考察するのであるが、では自己・自分とはなにもものであろうか。この問いは青年期においてなされる問いであり、哲学的思考の出現と同じくらい古い問いである。また、この問いは自己の存在、アイデンティティーの危機に瀕した場合に強く頭をもたげる問いである。では、この問いに窮したものにこう聞いてみてはどうだろうか、「なぜ生きなければならないのか？」と。この問いに対する私の答えはこうである、「生きることに意味などない」。先に否定しておくが、私は決して単なるシニシズムやニヒリズムを説いているのではない。野生動物はその本能の赴くままに走るし、まだ自己の存在や世界を懐疑することを知らない幼い子供は自然に生きる、人は生れ落ちて自己を認識したときには否応なくその存在はいつの間にかある。そのような事柄に意味や目的をあてがうのは無理があるといえる。意味とか目的の意識とかは本来、そのつど行動や表現を支える機能を持っていただけであって、「人生」や「生きる」といったあまりに抽象的な観念に適用すべきではない。生きる過程での様々な行動は、自分自身の生の充足それ自体という究極的目的に帰着するのである。もし人生に意味や目的を見出そうとするならば、意味や目的が行動や表現をその終局点の見地から対象化することであり、人生の終局点が死であることを人間は知ってしまったのであるから、人生全体の意味や目的は死に他ならないということになりかねない。

つまり、人生そのものにあらかじめ与えられた意味や目的はない。ただ私たちは、この世に生を与えられたという既定の事実の下に置かれているがために、

生きる本能的な意欲に支えられて、そのつど自分を納得させるに足る意味や目的を作り出さざるを得ないという条件を背負っているに過ぎないのである。

そこから筆者が導き出した「自己の生きる意味」に対する答えは結論から言うと、「人間は自己の利益の為に生きればよい」というものである。これは誰も他者の考えを理解しきっているか否かについてはっきりとした結論を述べることはできない、という教訓からの結論である。なぜならば「各人にとっては自分自身が最も遠いものである」のように、自分すら自分のことを完全には把握し切れていない、他者ならなおさらそうだからである。しかし、「利益」と聞くと金銭的・物質的な利益がすぐに連想され嫌な顔をされるが、それだけが私のいう「利益」では決してない。金銭や動物的欲求の他に、なんとなく一緒にいて気持ちが安らぐことや、楽しいといったことも「利益」として認めるのである。ではなぜ「自己の利益」なのかというと、前述の通り他者理解が完全なものではないからである。例えば、親孝行息子が母親のやるはずであった食器洗いを、母親を思ってしておいたとしよう。ここでは息子に母親に褒めてもらおうといった魂胆はなく、息子は母親を思って行動を起こしている。しかし、母親にとってそれが常にいいとは限らない、息子のそれは不十分で、こっそりやり直しをしなければならないかもしれない。これでは息子の行動は本末転倒である。このように、自分が他者のために行動をとる時、他者のためにと考えるのは傲慢な考えである。また、本来息子の行動は母親のことを思ってのものである。これを上記の「利益」の中で考えると、息子の中では母の幸せが、息子の幸せに直結している。そのため、自分の行動が他者のためではあるがこれを、それから得られる自己の利益のためと考えると、息子の思いは達せられたことになる。その上、「あなたのため」と言われた母親に比してより良い幸福感も得られるかもしれないし、やってもらったという心理的負担も比較的小さくなる。これは息子の目的に合ったものである。つまり、人間は自己の利益の為に生きていれば十分であり、その「利益」の中にどれだけの愛すべき人々を入れられるかがその人の「徳」のようなものといえる。

以上の考察より本来の問いである「自分とはなにのものであるのか？」との問いにも「利益」≡「生の充足」のために答える必要があるといえる。ではこの問いに他にも解答の方法はないであろうか、例えば、「男」、「足が速い」、「学生」

と言った自分の特徴等を答えることも可能であろう。だが、このようなものは他人にも該当するものであるから、非常に脆弱な答えだとすぐに気がつく。このようなものは他者から見る時の自分の材料であり、自己からのものではない。自分を自分たらしめているのは、他者である。人は他者に自己の存在・行動が影響を与えたときに自分の存在を確かめられる、人は親子、恋人、兄弟姉妹、友人という具体的関係の担い手と線で絡まりあい、関係性を揺り動かすことで自分が活動していることを実感し、その複合的な模様によりリアルな「自分」を感じ、新しい生きる意欲を生み出すのである。つまり、他者がいることによって我々は自己の理由が崩れかけたときにも生きてゆけるのである。それゆえ、自己のアイデンティティーは他者と共有し得るものであることが望ましい。なぜなら、われわれの、性、性格、職業、国籍等のカテゴリーにより人々の共有する座標に自分をあてはめていくことによって、座標の中に自分の位置を占めることができ、線を結ぶことができるからである。自己のアイデンティティーのことを精神科医のロナルド・D・レインは、「自分が何者であるかを、自分に語って聞かせる説話である」と言っている。(R. D. レイン、1975、p110) なるほど、自分の説話は他者から伝え聞くものでもある。なお、自己の存在の確かめ方としての他者への影響はそれがいじめのように悪いものであっても、良いものであっても可能であるから注意が必要である。

## 第二章 青年期その不安

青年期とは、子供の身体から大人の身体へと急激な変化を遂げる時期である。だがその変化の過程においては、身体の内部や外部にアンバランスが生じたり、早熟、晩熟といった個人差が増大したりする。このような急激な成長の時期においてもあますほどの身体的・精神的エネルギーを体内に感じる一方、見慣れぬ自己身体像、不慣れでしかも不安定な身体機能、更に同年齢の友達との差異、が原因となって強い不安感や不自由感を覚えることとなる。以上のような身体に関する不安と同様に、青年期には精神に関する不安も大きな不安である。

青年期は、自分なりの判断基準を築く上で必要な条件が整う時期であり、また、まがりなりにも自分の判断基準を形成することによって、心理的離乳を開始する時期である。青年期の判断基準は、常識にとらわれない斬新さ、革新性

を持つ一方、人生経験の不足のため一面的、理想主義的であるため、その基準に照らして親・教師等の彼らにとって重要な他者としての役割を担ってきた大人たちの行動を見ると、陳腐でしかも不順なものに見えてしまう。そのことが、親・教師・大人たちへの不信、反発に繋がってゆくのである。加えて、青年は子供としての依存性をまだ脱し切れず、しかも、自らの心の不安定さ、自信のなさに悩まされているため、親・教師・大人たちに自分を支えてくれる絶大な強さや巨大な包容力を求める。そして、大人たちに対する過大な期待が裏切られることによって、ますます不信感や反発心が増大するのである。そんな中、彼らは人間の個性、他とは切り離された一個の身体や心の持ち主としての「自分」を強く認識する時期である。そのため彼らは、それまでの両親との関係によって構成されたそれまでの自分を壊し、新しい人間関係や仕事を身につけることをとおして、自我を再構成する必要に迫られているのである。

だが、こうした青年期の不安の緩和・除去と自我の再構成・確立とは前述のようにただ一人で行うことができるものではない。

### 第三章 他者としての友人

こうした中で次第に重要な他者としての地位を占めてゆくのが友人・仲間である。親からの心理的離乳を果たし、一個の独立した人間として自分の意思にしたがって生きていこうとするときに必然に直面する孤独感や不安感、親子間の葛藤、緊張等を心のよりどころとなる友人において緩和し安定感を得ようとする。また他方では比較対象とするのである。アメリカの社会心理学者フェスティンガーがいうように、比較は自分と類似した他者との間で行われるのである。これは類似した他者との比較は自分の意見等が社会的真実であることを示すが、自分と全く異なった他者との比較は参考にならないからである。この比較から彼らは自己形成、「自分の説話」の共有を模索し、自立した個人としての社会関係の歩みを始めるのである。しかし、友人に対する役割期待が度を越し、悩みや不安の解消の全てが大人を回避し友人だけに求められるようになれば非行やいじめに発展するおそれもでてくる。

このように友人は自己形成の過程において「青年のアイデンティティーの軸になり」また、「友人関係を通して大人の社会的関係の訓練をする」という重

要な役割を演じるものの、他方では自我を歪めてしまうおそれもある。この友人の役割の二面性を考慮した助言がなされるのが望ましい。ここにやはり先人としての大人の役割があるのではないかと思う。

## 終章

近代化を果たして豊かな成熟社会を迎え、不況と停滞の中で、自分の生きる意味や目的が感じられない空虚な空気が流れる。こういった社会的要因があるが故に人々はことさらそれを欲しているのであろう。だがそれは、以上みてきたようにどこかにある、あったものではなく、仮の、本当ではないと思っている今の自分の関係性の延長線上にあるものであり、自分一人で完結するものではない、開いたものである。他者理解は完全にはなしえないかもしれないが、豊かな関係性をもち、一人でも多くの愛すべき他者の「利益」を自己の「利益」として感じる事が、充実した生、豊かな「自分」を感じられる生き方であることを、青年期の人々のみならず、この空虚感のなかで生きる人々に伝えたい。こうしてみると人間は実に不完全な存在である。だが、この不完全なものが完全を求めようとする姿勢、その人間の儂くも謙虚な姿勢が人間らしく、私には愛らしくも感じられるのである。

【引用文献】

R. D. レイン、『自己と他者（志貴春彦、笠原嘉訳）』、みすず書房、1975年。

【参考文献】

高田利武、『他者と比べる自分』、サイエンス社、1992年。

鷺田清一、『じぶん・この不思議な存在』、講談社現代新書、1999年。

上田紀行、『生きる意味』、岩波書店、2005年。

浜田寿美男、『私のなかの他者』、金子書房、1998年。

伊藤順康、『青年期の自己形成』、川島書店、1982年。

大庭健、『他者とは誰のことか』、勁草書房、1989年。

福井康之、『青年期の不安と成長 自己実現への道』、有斐閣新書、1980年。

石浜弘道、浅見聡、中川久嗣、『他者の風景』、批評社、1990年。

村瀬孝雄、『アイデンティティ論考』、誠信書房、1995年。

鷺田清一、『死なないでいる理由』、小学館、2002年。

荘子、『荘子（岸陽子訳）』、徳間書店、1973年。

鴨長明、『方丈記』、武蔵野書院、1958年。